日本泳法と競泳の比較

Comparison of Japanese swimming and swimming

1K08B039 - 8　　大賀貴嗣

指導教員　主査　寒川恒夫先生　　副査　奥野景介先生

【緒言】

この研究を行うきっかけは、競泳の競技者として活動している中で他分野の文化、「日本古流泳法」に触れる機会があったからである。早慶戦や所属ゼミにおける講義などがその最たる例であり、それを機に興味が湧き始めた。そして現代において進化し続けている競泳と現代まで脈々と受け継がれてきた伝統の日本泳法を比較、研究してみたいと思うようになり、この題材で研究をする事にした。尚、比較対照は日本泳法、熊本に存在する流派「小堀流」を比較の対象とする。

【歴史の比較】

日本泳法と競泳それぞれの起源は水泳となり、生活と密接に関わっていた。古くは古代エジプトやインダス文明などの時代にも存在している。日本においてそこからまず発祥したのが日本泳法であり、戦争に使われる事を主としたもので、これは世界各地にも戦争に用いられていた泳法、水術が存在する。そして競泳が発祥したのは水泳の長い歴史から見てもごく最近のことである。また日本泳法においても競技会となるものが開催されたのも明治に入ってからであり、他のスポーツ競技から比べると競技化は遅く、メジャースポーツに比べると発展は遅く技術的な面での発展も遅かったと思われる。しかし戦後の目覚しい活躍により、一気に日本のお家芸となり、現在に至る。

【道具の比較】

競泳において道具は泳ぐ技術と並ぶほど重要視されている。戦後当初は木綿や絹が一般的であった。その頃は木綿や絹の水着は高価であったためふんどしで練習を行っていた選手がほとんどだった。しかし高価な割りに水を吸い伸縮性が無かったため泳ぎにくい水着だった。そこから水着への研究が始まり、水を吸わないかつ伸縮性のある泳ぎやすい水着の開発がされていった。そして開発されたサメ肌の水着が水着の考え方に大きな変革をもたらし、現在のような高速水着に至るのである。最近の水着でいえば記憶に新しいレーザーレーサー等である。これらの高速水着は規定の変更によって着用できなくなり、また規定も厳しくなったが、それでもメーカーは選手が泳ぐにあたって有利な水着を開発し続けている。その他にも練習で使用する道具が多様にあり選手のレベルアップに貢献している。次に日本泳法の道具であるが、練習や試合においても数々の道具がある競泳に比べて日本泳法は競争的な成分を含む競技性が低く、抵抗を最小限に抑えるための道具や、感覚的な鍛錬、速く泳ぐために鍛えるための道具などはなく、競泳とは相容れない性質を持っている為にこのような違いがあるのだと考えられる。よって提携しているスポンサーやメーカーなども特にないようである。そのことが日本泳法の知名度の低さや理解のなさにつながっているのだと思う。

【泳法の比較】

泳法や技術的な違いを比べてみると、根本的に泳ぎや応用されている技術が違うのが分かると思う。基本的に日本泳法は顔をつけない泳ぎ、競泳は顔をつける泳ぎ。なぜこのような違いが出るのか。それは出来るだけ抵抗を減らし、タイムの短縮につなげる泳ぎ。それに対して日本泳法がなぜ顔をつけない泳ぎなのか、それは競泳と違い、速さやタイムを競うことを主としていないからである。日本泳法は溺れないため、が根底にあり、様々な状況で川や海などを泳いでいるなかで顔をつけることが非常に危険な可能性を含んでいることは容易に想像できる。よって泳いでいる最中の危険を最低限にし、なおかつ様々な動きや作業ができるようにと考えられたものであり、常に速さを求め危険性よりも抵抗の減少に重きを置いて記録第一に考えられてきた競泳とは全てにおいて違う。